

図書館司書課程における産学連携の教育実践 —「図書館システムづくり」概念の構築と「移動」する 図書館としてのブックトラックの創造へつなぐ—

Educational Practices of Industry-University Collaboration in Librarian Training
Courses: Building a Concept of “Making Library Systems” and Creating a Book
Track as a “Moving” Library

石川 敬史¹⁾
Takashi ISHIKAWA

木原 正雄²⁾
Masao KIHARA

渡辺 哲成³⁾
Tetsunari WATANABE

要 旨

十文字学園女子大学司書課程では、各学科の専門的学びを活かしながら、図書館の現場とのつながりを重視した学科横断的な教育プログラムを構築している。こうした教育プログラムを司書課程単独で実践することは難しく、図書館関係企業や、地域に位置する書店、公共図書館などと連携を図ることにより可能になる。図書館現場が生きた教材として位置されることにより、学生の学びの成果が図書館の現場に還元され、同時に図書館関係者（図書館員、図書館関係企業社員等）の現場力の向上と、地域における図書館種をこえた図書館関係者同士の関係性構築につながる。

こうした視点に立脚し、本稿では2013年度より進めている産学連携による2つの教育実践を報告する。第一は、利用者参画型の「図書館システムづくり」概念の構築を視野に入れ、日本事務器株式会社と連携した図書館システムを活用する教育実践である。第二は、図書館という「館（やかた）」を越えた「移動」する「図書館活動」の現代的意義の分析を視野に入れ、キハラ株式会社と連携したオリジナルブックトラックの制作である。これら企業との産学連携による教育実践を通して、学生と企業社員の学びを考察する。

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部文芸文化学科
Department of Literature and Culture, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ キハラ株式会社マーケティング部
Kihara Co., Ltd

³⁾ 日本事務器株式会社事業推進本部
Nippon Jimuki Co., Ltd

キーワード：司書課程、産学連携、図書館づくり、図書館システム、ブックトラック、移動図書館

1. 産学連携の教育実践の目的と背景

1.1 学生協働

近年、各地の大学図書館において、学生協働による多彩な活動が広がっている。協働とは、「各々が責任と役割を担い、共通の目的の実現に向けて協力して取り組む実際的な労働」¹⁾である。これを踏まえると、大学図書館における学生協働とは、大学図書館の理念・目的を実現するため、自主的に組織された学生らが、大学図書館の運営に主体的にかかわる活動といえる²⁾。

例えば、お茶の水女子大学附属図書館における「LiSA (Library Student Assistant)」³⁾は、図書館の日常業務支援や自主企画として館内の展示、図書館ツアー、他大学図書館見学などを実施している。他方、和光大学附属梅根記念図書・情報館における「Let's Read Project」は、本を中心としたイベントを企画・実行するプロジェクトであり、選書ツアーの実践や館内の本棚を設営している⁴⁾。このように、学生協働の活動内容として⁵⁾、①図書館業務のサポート、②学生選書・POP作成、③チューターとしての学習支援、④学生サークル・ボランティア活動などに整理できる。

大学図書館における学生協働の拡大の背景には、2000年代以降の高等教育施策を基盤としたラーニングコモンズの導入や上級生による学習支援の広がりがある。既に多くの実践報告から、①大学図書館の活性化、②学生の主体性を育成、③図書館員の学びなどの成果が明らかになっている。

十文字学園女子大学（以下、本学とする）においても、2012年よりライブラリーサポーターが組織され、活動を展開している。

1.2 図書館づくり運動

かつて公共図書館において、1970-1980年代に「図書館づくり運動」⁶⁾が各地で広がった。図書館設置の働きかけのみならず、図書館サービスの

充実や図書館運営の市民参画につながった運動である。同時に、図書館員も市民とともに成長し、さらには市民の自治の力を育むことにもつながった⁷⁾。この運動の多くは、1960年代以降、子どもの読書環境の整備を目的に、各地で女性らが主体的に活動した地域文庫や家庭文庫を基盤としていることも忘れてはならない⁸⁾。

とりわけ埼玉県内では、朝霞市と鶴ヶ島市の事例が全国的に知られている。朝霞市立図書館は、1982年10月に「図書館を考える会」による図書館設置の要望を契機として、『図書館を考える会ニュース』の刊行、「図書館を学ぶ講座」の開催などの市民の運動と図書館員、議会の三者が一体となって1987年10月に開館した⁹⁾。また、鶴ヶ島市立図書館も、1986年10月に発足した「鶴ヶ島の図書館を考える会」を中心に、図書館見学や図書館市民懇談会の開催などを経て、1996年10月に開館した歴史がある¹⁰⁾。

1.3 地域の図書館づくりとして

図書館界では、図書館種（大学、公共、学校（小・中・高）、専門の各図書館）による組織体（協会、協議会等の団体）を基盤としたつながりがあるものの、図書館種をこえたつながりは十分とはいえない。仮に図書館間のネットワークが存在したとしても、図書運搬の物流をはじめとしたネットワークが中心であろう。

しかし、地域に視点を照射すると、多様な図書館種が存在し、その図書館には多くの「人」（図書館員、利用者（市民、学生）、ボランティアなど）が存在する。同時に、図書館活動を支えている関連企業（書店、システムベンダー、什器・家具メーカー、出版社等）も存在する。しかし、近年は館種を問わず非正規で女性の図書館員数が極めて多く、集団としての力量形成とキャリア形成が大きな課題としてあげられる¹¹⁾。図書館利用者についても、学生協働の実績や市民の図書館づくり運動の経験が存在しつつも、図書館種をこえた利用者のつながりは十分に意識されなかったといえる。

図書館をつくるプロセスにおいて、特定の目的を達成することのみならず、人とのつながりの形成や学び合いが内包されているならば、図書館種を越えた地域において図書館員や利用者など図書館関係者との関係性の構築や、ともに学び合う場の形成が可能であろう。本稿では、図書館種を越えた地域における図書館づくりと図書館関係者との学びの場の構築を視野に入れ、本学司書課程における産学連携の教育実践を報告する。

2. 本学司書課程と産学連携プログラムの位置

本学司書課程は、2011年度の図書館法施行規則の改正に伴い、2012年度入学生から新たなカリキュラムを構築した。同時に、従来まで短大と大学の社会情報系学科に司書資格取得が限定されていたが、2012年度より全学科にて履修が可能になった。

そこで、本学全体のカリキュラムの中に司書課程の教育プログラムがどのように位置づけられるのかを明らかにするため、2012年度に司書課程履修学生への意識調査を実施した¹²⁾。また、2015年度に本学短期大学部表現文化学科が人間生活学部文芸文化学科に改組されることになった。本学短期大学部司書課程が閉鎖されるため、本学短期大学部における司書課程教育プログラムの積み重ねと小史を整理した¹³⁾。

こうした検討から、単に司書資格を取得することが本学司書課程の目的ではなく、本学各学科の専門的学びを活かしつつ、学科横断的な学びにつながる本学司書課程の教育プログラムへの方向性を確認した。現在は「図書館づくり」を射程に、図書館の実践と現場とのつながりを重視した以下の教育プログラムを構築している。

- (1) 生涯にわたる女性のキャリア形成と女性が働く図書館現場のリアリティーを早期に発見するプログラム（「図書館基礎特論」等）
- (2) POP作成や選書、特集図書コーナーの設

定など、図書館資料に付加価値を与え、利用者に表現するプログラム（「図書館情報資源特論」「情報サービス演習Ⅰ」等）

- (3) 入学時の図書館（＝読書）に対する固定観念を打破し、情報入手のための社会的装置として図書館観を育むプログラム（「図書館情報技術論」「情報サービス演習Ⅱ」等）
- (4) 図書館運営への参画と主体形成（「図書館概論」、ライブラリーサポーター等）
- (5) 図書館を取り巻く仕事の発見（図書館系企業等へのインターンシップ、自主ゼミ）

こうした教育プログラムは、本学司書課程単独で実現することは難しく、図書館関係企業や、地域に位置する書店、公共図書館、大学図書館、専門図書館などと連携を図ることにより、実践することが可能である。すなわち、図書館現場が生きた教材として位置されることにより、学生の学びのプロセスと成果が図書館の現場に還元され、同時に図書館関係者（図書館員、図書館関係企業社員等）の現場力の向上と、地域における図書館種をこえた図書館関係者同士の関係性構築につながる。

本稿では、こうした本学司書課程の教育プログラムの方向性を踏まえた産学連携の教育実践を報告する。具体的には、①利用者参画型の「図書館システムづくり」概念の構築を視野に入れ、日本事務器株式会社（以下、NJCとする）と連携した図書館システムを活用する教育実践、②図書館という「館（やかた）」を越えた「移動」する「図書館活動」の現代的意義の分析を視野に入れ、キハラ株式会社（以下、キハラとする）と連携したオリジナルブックトラックの制作である。

なお産学連携とは、企業と大学とが共同で行われる研究や商品開発等の連携活動を指す。近年は、国や地方公共団体などの「官」も加わった産学官連携が推進され、人材育成など3つのセクターが相互に成長し合う取り組みとして注目されている¹⁴⁾。

3. 図書館システムを活用した産学連携教育プログラムの構築

3.1 図書館システム

現在、多くの図書館では、図書館種を問わず、図書館システムが導入されている¹⁵⁾。図書館システムで行われる業務・サービスは、①貸出・返却、相互貸借などの閲覧系業務、②図書・雑誌など蔵書管理系業務、③蔵書検索・横断検索などの情報提供サービス、④統計、予算管理、コード設定の運用管理などに構成されている。こうした図書館システムの多くは、システムベンダーなどが提供するパッケージシステムである。具体的な構成は、①パッケージシステムのソフト、②サーバー、PC、バーコードリーダーなどの機器、③LANケーブル、ハブなどのネットワーク系機器、④定期保守、障害管理、⑤自動貸出機、入館システムとの連携などの付帯機能に区分され、図書館の諸活動が図書館システムに大きく依存される傾向にある。こうしたシステムは、図書館が作成する仕様書（要件定義書）に基づき、入札等によりベンダーが決定される。

3.2 「図書館システムづくり」への視角

(1) 図書館員の意志・仕様書の作成

図書館システム導入の目的として、業務の効率化、情報提供サービスの充実、セキュリティ対策などがあげられる。図書館システムは定期的にバージョンアップが図られ、機器の保守年限も踏まえ、各館は5年程度でリプレイスを実施している。他方、こうした流れが積み重なると、図書館や教育機関に導入されるにも関わらず、道具として他者（ベンダー）に与えられたシステムを単に導入することが目的となってしまう傾向になる。しかし、図書館システムの導入には、図書館員が実施したいサービスの意志と表現（仕様書）、SEや組織内のコミュニケーションなど、図書館員が図書館を主体的につくる可能性を秘めている。

(2) 図書館づくりと「図書館システムづくり」

先述したように、かつて公共図書館においては、1970-80年代にかけて図書館づくり運動が各地で広がり、図書館運営の市民参画と市民の自治の力を育むことにもつながった。他方で、現在の図書館システムが図書館の諸活動に占める位置を踏まえると、市民参画型による図書館システム導入の可能性もある。図書館員が「館」に籠り、図書館システムを自己完結的に導入するのではなく、市民や図書館システムの関係者と共に学びあいながら、図書館サービスの充実を検討し、図書館システムを育むことができよう。

3.3 教育プログラムの視角と方法

2011年度の図書館法施行規則の改正により、必修科目として「図書館情報技術論」が新設された。図書館に関する情報技術を修得する科目であるが、本学司書課程では、本好きな人文学系女子学生が、苦手意識のある情報技術から図書館サービスの可能性をどのように拓くか、という課題がある¹⁶⁾。

そこで本学司書課程では、「図書館システムづくり」概念の構築を念頭に置きつつ、「図書館情報技術論」等の司書課程科目において、NJCとの産学連携により、図書館システムを活用した教育プログラムを設計、実践した。既に「図書館情報技術論」において図書館システムを活用した授業実践には、菅原信悟¹⁷⁾や今井福司ら¹⁸⁾の報告がある。しかし、本実践では、図書館システムを単なる入力手段として捉えるのではなく、図書館システム関係者全体をも対象に、図書館を主体的につくり、図書館への学びにつなぐことを目的に、図書館システムを活かした教育プログラムを実践した。

3.4 教育実践の構成と概要

NJCと本学司書課程による教育プログラムは、以下の3点である。

(1) 「図書館サービス概論」(2013年度)

2013年度、本学図書館における図書館新システム導入時に、学生とともに新しいOPAC (Online Public Access Catalog) の要件 (パラメータ値) を検討した。具体的には「図書館サービス概論」1コマ (前期、約50名履修) において、「カンガエル×7」と題したワークシートに基づいた演習を実施した。

- ①旧システムと新システムとのOPAC画面構成、検索結果表示方法の比較
- ②新システムOPACと他大学OPAC画面構成、検索結果表示方法、付加機能との比較、必要な付加機能を検討
- ③新システムOPACの付加機能の検討 (色、新着案内、ランキング、投書BOXの表示等)

こうした比較分析を通してOPACの変化に気づき、未来のOPACを自分の言葉で表現することを目指した。学生が考察したOPACの色や画面構成などは、本学図書館新システムOPACにも一部反映された。他方、NJCは今後の図書館システムやOPAC開発の参考意見を学生から聞くことができた。

(2) 「図書館情報技術論」(2013, 2014年度)

新システム導入 (2013年8月) 後、「図書館情報技術論」(後期、約70名履修) において、以下の3コマの教育プログラムを設計した。

①「イマ×ムカシ：図書館システムの最前線から」

図書館システム開発に携わっているNJC事業推進本部社員が、過去と現在とを比較しながら、図書館における図書館システムの位置を考察する講義である。産学連携の教育プログラムの初回であり、図書館システムの可能性を考える契機とした。

②「ツカウ×カンジル：実際の図書館システム」

本学図書館で使用している図書館システムを活かし、図書の整理作業を中心とするテクニカル系業務の流れを体感する演習である。A3判のワークシートを用い、発注データの作成→目録→検収→所蔵登録の流れを追うことや、利用者登録を含

む貸出・返却の演習を実施した。これらの演習を通して、入力作業自体が目的ではなく、蓄積されている図書データの構造と関連性を検討し、「何のためのデータ入力か」、「誰のための図書館システムか」を考察した。

③ミライ×カンガエル：未来の図書館システムをツクル

最終回は、これまでの講義と演習を踏まえ、事前の課題である「未来の図書館システムの企画書」を用いた演習である。各グループにて報告の後、発表内容の長所と短所を各グループで模造紙を用いてKJ法により洗い出し、短所を克服するための具体的な方法や、長所を活かしたさらなる図書館システムの可能性を議論した。学生が提出した課題 (「未来の図書館システムの企画書」) は、NJC社内にて図書館システム担当社員も閲覧・評価した。

(3) 「図書館基礎特論」(2013, 2014年度)

本学司書課程選択科目である「図書館基礎特論」(前期集中、約50名履修) において、NJCの図書館システムSEのうち司書資格を有する文科系大学出身の女性 (各年度1名; 計2名) が、自身のキャリア形成に関する講義を行った。学生にとって身近なキャリアモデルから、図書館システムSEのキャリア形成と司書資格取得の意義を考えた。

3.5 「学び」の概要

こうしたNJCとの産学連携による教育実践は、学生の学びと同時に、NJC社員の学びにもつながった。ここでは、(2)「図書館情報技術論」の教育実践から、ワークシートや授業後のアンケートを用いて両者の学びの概要を紹介する。

(1) 「イマ×ムカシ：図書館システムの最前線から」

①学生

・今後も新たなシステム開発に向かって欲しいです。私達も負けじと頑張らなければならないと思いました。

- ・興味が出たので、自分でも調べてみようと思う。
- ・私はPCの操作は苦手ですが、楽しそうだと思います。
- ・今の先進のサービスを使いこなせない世代には、どのような配慮が必要か？

授業での図書館システム開発者によるリアリティーのある熱い語りから、図書館システムへの熱意が学生に伝わり、学生の情報システムや情報技術への苦手意識の克服につながることができた。同時に、図書館システムへの批判的な視角を持ちつつ、図書館システムを自分の言葉で語る契機ともなり、学生への課題「未来の図書館システムの企画書」の着手につながることができた。

②NJC社員

授業に登壇したNJCの社員は、自ら経験した図書館システム開発史の振り返りにより、経験の整理以上に自身のキャリアの振り返りにつながった。また、開発担当者として当然の事実を、どのようにわかりやすく利用者（学生）に伝えるのか（教授法）を再考することができた¹⁹⁾。

(2)「ツカウ×カンジル：実際の図書館システム」

①学生

- ・人の力があるからこそ、システムが成り立っている。
- ・図書館を使いやすく創っているところに利用者に対する思いやりが見えて感動しました。
- ・図書館システム無しには、図書館は成り立たないというくらいの影響があると思います。
- ・自分に知識の基盤がないと使いこなせないものだ気づけた。

こうした学生のコメントから、図書館システムへの単なる入力をはるか越えて、テクニカル系業務の意義、連続性、データ構造の検討をはじめ、チームとしての図書館（作業の分担）や、データを利用する利用者への視点など、多様な視角を育

むことにもつながった。

②NJC社員

システムベンダーにとって、図書館システムのユーザーは図書館（図書館員）であり、「ユーザーのユーザー」（利用者）は遠い存在であった。加えて、図書館システムとは、「業務システム」+「利用者サービスシステム」という認識であったため、本演習を通して、図書館システムが単なる管理システムではなく、教育支援システムとしての意義と可能性を検討することができた。すなわち、教育機関における図書館システムの価値（「教育」への活用）への再考と転換に気づくことができた。

(3)ミライ×カンガエル：未来の図書館システムをつくる

①学生

- ・図書館とそれを支える図書館システムとの関係を実際に作業しながら考えることで、図書館を成り立たせる仕組みを理解できた。
- ・今あるシステムだけではなく、システムを創り上げることで、図書館が成長している。
- ・社会の進化とともに、図書館も進化していると思った。図書館員はそれについていかなければならないと思った。
- ・図書館にはもっと工夫できるところがある。

このように、図書館システムを一つの道具として狭く捉えるのではなく、これまでの歴史や時代背景に沿った図書館サービス方法を踏まえながら、学生自らの問題意識を明確にし、図書館システムの今後の可能性を検討するなど、さらなる学びの契機につながった。情報技術という苦手意識に固執することなく、図書館システムの意義や役割を考えながら、図書館システムの未来像を自分の言葉で表現することができた。

②NJC社員

学生が提出した課題「未来の図書館システムの企画書」を読んだNJC社員から、以下のようなコメントがあった。

- ・今は図書館へ行くものという概念から外れてきていると感じました。
- ・利用者の状況（年代やその日の気分など）に沿った検索する、というアイデアが印象的。
- ・気分や感情、内容をイメージするあいまいな言葉、あらずじ、登場人物から簡単に検索を行い、自分が求めている本を探すことを考えていた。

他方で、課題や問題点として、以下の指摘もあった。

- ・提案したサービスを継続して提供していくこと。
- ・現在の技術でどこまでできるか、何が課題となっているかの対比が必要。
- ・一部の図書館では実現されているものもあった。
- ・そのシステムをどのように実現するのか、というイメージができていて良い。

NJC社員は、現実的な視点を忘れず、しかし、製品・サービス開発の知恵、学生の未来志向の考え方から大きな刺激を受けていた。そして、教育機関における図書館システムの存在意義と、共にシステムをつくる可能性（図書館システム以外の情報システムも）を認識することができた。

3.6 「図書館システムづくり」へ

2年間²⁰⁾に及ぶわずか数回の授業・演習ではあったが、図書館システムを活かして学生とNJC社員の気づきや学びを育むことができた。

もちろん本学図書館員においても多くの学びがあった。例えば、ユーザーとしての学生・教員と図書館との協働の発見や、学生の視点・感性への気づき、今後のカスタマイズの計画、作業が目的ではない図書館業務と教育活動との関連性の再認識である。他方で、学生の要望事項を図書館システムへ反映することへの葛藤もあった。

NJCとの産学連携による教育実践は大学図書館の事例として位置されるが、公共図書館においても、市民とともに図書館システムの要件を検討する可能性があろう。最新の図書館パッケージシステムの導入を図っても、自ずと図書館サービスの充実や活性化にはつながらない。図書館や教育機関の目的を踏まえ、図書館システムの必要性と導入のプロセスを改めて問い直す必要がある²¹⁾。

4. 産学連携による「ブックトラックづくり」

4.1 ブックトラック

ブックトラックとは、図書館内や書店内において図書や雑誌などを運搬する台車のことであり、多くの什器企業が既製品として販売している。1段から3段までのサイズがあり、色も4色程度から選択できる。

図書館での使用方法として、①図書の排架・返却作業、②返却棚・返本台、③館内での展示棚、④蔵書点検用の作業台、⑤調べ学習用資料のストックなどがあげられ、図書館の日常業務には欠かせない道具である。近年は、満載した図書の重量をアシストするため、電動自転車の動力を活用した「パワーアシストブックトラック（ブンブン6）」（キハラ株式会社）も販売されている。

ブックトラックは、一度購入すると故障することなく長期間使用する道具であり、館内デザインの統一感を図るため、図書館が新設される際に、館内の色彩と揃えて制作される場合もある。

4.2 「ブックトラックづくり」への視角

(1) 図書館づくりと「ブックトラックづくり」

「図書館づくり運動」とは、先述したように、市民が参画しながら図書館員とともに図書館を学び、地域に図書館の設置や図書館サービスの充実を目的としている。図書館の新設やサービスの拡充以外にも、施設の改修やリニューアル時に、書架や閲覧席のリニューアル、床の貼り換えなど細部にわたる什器の整備に対して、どのように市

民・利用者の参画につなぐのかが課題であろう。

他方、市民・利用者の参画型の活動として、公共図書館においては図書館友の会や図書館ボランティアが、大学図書館においては学生協働の活動の中にみることができる。これらの活動においては、図書の整理や排架、お話し会など「館（やかた）」という建物の中の活動や、図書館員や教員との連携など「大学」という敷地内での活動が多く散見される。

キャスターが装備されたブックトラックには、参画型の図書館活動を手軽に「館」の外に移動することができる可能性を秘めている。

(2) 動く図書館とメッセージ性

1949年9月14日に千葉県立図書館が巡回を開始した移動図書館「訪問図書館ひかり」は、全国各地に大きな影響を与えた²²⁾。図書の入手が困難な時代に、開架式の書架やスピーカーが装備された移動図書館は、農山漁村に文化という「ひかり」を運んだ。こうした移動図書館車には、図書館の目指すべき姿が体现され、建物の図書館とは異なるメッセージ性を有していた²³⁾。近年は、東日本大震災以降、移動図書館は改めて注目されている。

移動図書館とは、単に図書を運ぶ手段ではなく、図書館の理念を実現する一つの手段であり、何らかの移動手段によって図書館資料を運び、図書館員によるサービスを展開することである²⁴⁾。移動図書館を「移動」する「図書館活動」という視点でみるならば、キャスターが装備され、外装の色彩・デザインが自由に設定できるブックトラックは、どのようなメッセージ性を有して「館」の外へ移動できるのであろうか。オリジナルブックトラックには、現在の移動図書館実践を豊かに創造する可能性を秘めている。

4.3 教育プログラムの視角と方法

(1) 司書課程自主ゼミ

本学司書課程においては、以前より図書館や図書館系企業へのインターンシップの要望が学生か

ら寄せられていた。そこで、3年生の希望者を対象に2014年度より図書館系企業等へのインターンシップを開始した。こうした学生への事前事後指導のため、本学司書課程では少人数の自主ゼミを組織した。インターンシップへ参加する以前に、大学外の企業社員とのコミュニケーションを円滑に行い、チームでプロジェクトの推進を経験することを踏まえ、キハラとの産学連携によるブックトラックづくりを進めた。

(2) プロセスと完成後の活動の重視

キハラは既に他館からの依頼により、オリジナルブックトラックを制作した実績があったが、これらの活動は制作することが目的であったといえる。本学司書課程とキハラとが産学連携にてブックトラックをつくる意義として、第一に、回り道する制作プロセスの中から、学生とキハラ社員が相互に学び合う関係性を構築することである。第二に、完成後のブックトラックの活用法を今後キハラとともに創造することである。「館」の中や「敷地内」での活動ではなく、利用者参画型による「移動」する「図書館活動」という視点に立った実践につなぐことができる。

4.4 教育実践の構成と概要

(1) 2014年度

初年度はキハラからの全面的な支援を仰ぎながら進められた。5月に開始し、以下のような内容を学生とキハラとともに検討しながら、2台のオリジナルブックトラック（写真1）を制作した²⁵⁾（デザイン校了は9月上旬、完成は10月）。

- ・学生が考える理想のブックトラックについてグループワーク、共有化
- ・ブックトラックの歴史、種類などのレクチャー、使用方法の可能性の検討
- ・ブックトラックのコンセプトの明確化、デザイン案の策定、使用目的の検討
- ・メッセージ（言葉）、フォント、配色等の検討
このうちデザインの検討については、キハラより近年の書店等の商業施設の広告デザインの傾向



写真1



写真2

をレクチャーいただいた。ブックトラックに描かれるデザイン・イラストは、学生が手書きにて案を推敲し、キハラがデジタル化して完全原稿を作成した²⁶⁾。

(2) 2015年度

2015年度は5月下旬から開始した。制作の方法は前年度とほぼ同様の流れであるが、前年度と同様のオリジナルブックトラック3台(写真2)に加え、NJCから学生の発案による1台の制作依頼(費用はNJCが負担)があった。制作プロセスの中で、昨年度と異なる点は以下の通りである。

- ・他館のオリジナルブックトラックの紹介
- ・前年度活動した学生から、プロセスや成果、課題の報告と共有化
- ・NJCの依頼によるブックトラックのコンセプトと使用目的の検討

2015年度は、学生が検討したデザイン案を学生自身でデータにて完全原稿を作成し、キハラが最終確認・校正をするという流れを採った。前年度の経験があったため、ブックトラックのコンセプトとメッセージ性を重視することができた²⁷⁾。

4.5 「学び」の概要

(1) 学生

産学連携によるブックトラックづくりを通し

て、学生は以下の点の学び・気づきにつなげることができた²⁸⁾。

- ・ブックトラックを活用する図書館員、図書を閲覧する利用者の視点を考えること。
- ・完成したデザインを常に想像しながら、ブックトラックを活用する「場」を検討すること。
- ・プロセスの中で、企業社員の方々との出会いや数多くの支援。
- ・学科の枠を越えた学生同士のつながりとチームで課題を解決していくこと。
- ・ブックトラックの役割と可能性、さらには図書館用品の可能性。

学生にとってブックトラックは、馴染みのある図書館用品ではなかった。しかし、場所を選ばずに移動できるという特異性、オリジナルのデザインによるメッセージ性、積載できる図書に制限のある限界性を背景に、既存のブックトラックの役割と使用方法を超えた可能性を検討することができた。今回の産学連携が学生中心の取り組みであったため、常にキハラ社員の視線と評価を受けつつも、学生らがともに協力しながらブックトラックを完成させるという責任感と使命感も育まれた。

(2) キハラ社員

産学連携によるブックトラックづくりにおいて、学生が考えるというプロセスを重視したため、キハラ社員と学生との積極的な対話から、学生（利用者）が考えるアイデアや着想を把握することができ、新たな商品開発の着想にもつながることができた。学生が自らの考えを表現し、楽しみながら参画した学生の姿勢から、チームワークの良さ、コミュニケーション能力の高さ、参加する態度や話し方について、キハラ社員が学ばなければならぬ点も明らかになった。

また、一般的な産学連携の枠組みにおいては教員が中心的な位置を占めていたが、本実践では学生の発想や考えを中心に置いていた。したがって、キハラと教員との対話にてプロジェクトを推進することなく、学生との対話の中で教育的な実践としての推進に発見があった。特に、他館のオリジナルブックトラック制作は、キハラ営業担当と図書館担当者との間で打ち合わせして進めているが、今回は教育的な産学連携を強く意識し、さらに学生が共に思考するプロセスをも重視しているため、完成した際の達成感が大きい。このことは、今後のブックトラックの活動にもつながるといえよう。

4.6 移動する図書館としての「ブックトラック」

こうした産学連携により、現在本学図書館はオリジナルブックトラックを5台保有している。これまでに以下の機関へ巡回した。なお、ブックトラックの運搬には自動車を使用している。

①2014年度「図書館情報資源特論」

- ・2014年12月：新座市立中央図書館（1台）、紀伊國屋書店さいたま新都心店（1台）
 - ・2015年3月：埼玉県立新座高校図書館（2台）
- 履修者約20名を各班に分け、各機関に特集コーナーを設営することを目的として、選書やPOP作成、展示装飾を実施した。

②2015年度「図書館情報資源特論」

- ・2015年6月：With Youさいたま（埼玉県男女

共同参画推進センター）情報ライブラリー（2台）

水無田气流氏の講演会にあわせ、女性の多様な生き方をテーマに、選書、POP作成、展示装飾とともに、学生による来場者へのプレゼンも実施した。

③貸出依頼

- ・2015年10月：新座市立中央図書館（2台）、埼玉県立新座高校図書館（3台）

新座市立中央図書館へは特集図書展示のために貸出依頼があった。また、新座高校図書館は9月に実施した本学ライブラリーサポーターと新座高校図書委員生徒との交流会で作成したPOPを展示するため、貸出依頼があった。

オリジナルブックトラックの巡回は始まったばかりである。しかし、産学連携によるブックトラックづくりとその巡回について「移動」する「図書館活動」の視角から予備的に考察すると、①産学連携先の企業社員や、巡回先の図書館員や利用者など、多くの人を巻き込み、地域や社会へのエンパワメントにつながる可能性、②ブックトラックが巡回することは、図書を運ぶこと以外に、ブックトラックに込められた学生の想いも運ばれること、③これらが総体的にメッセージ性を発していること、などをあげることができる。今後、こうした実践を積み重ね、移動図書館の現代的意義や定義の再構築にも結びつける²⁹⁾。

5. おわりに

図書館とは単なる「館」ではなく、人類の「知」を保存し、市民の学習権、知る権利、社会的生存権を保障する社会システムである。1館、さらには一人の図書館員でその理念を実現することは極めて困難である。複数の図書館・図書館員の協力を得ながら、市民・利用者の主体的な参画と図書館関係企業の真摯な支援を通して、図書館現場の限界と定められた制度を乗り越えることができよう。そのプロセスに関わる全ての人々は、必然的

に人とのつながりと学び合いに拡がり、図書館の理念を実現する人へ育まれる。

謝辞

本稿の産学連携による教育実践は、2013、2014年度大学改革特別経費（図書館）と、2014、2015年度プロジェクト研究費（研究代表者：石川敬史）の成果として積み重ねた実践の一部である。本実践にあたり、安達一寿副学長（2012年度まで図書・情報センター長）、東聖子館長をはじめ、本学図書館職員の皆様、NJCとキハラの皆様より多大なるご支援をいただきました。改めて感謝申し上げます。

なお本稿は以下の口頭発表の内容を加筆・修正している。

- ・2013年第15回図書館総合展ネオシリウス・ユーザー・フォーラム（NJC主催）石川敬史、近藤秀二、渡辺哲成「ツクル×マナブ×ヒラク：産学で図書館システムを教育に活かした試み」（2013年10月30日）
- ・2015年度第17回図書館総合展ネオシリウス・ユーザー・フォーラム（NJC主催）石川敬史、木原正雄、武藤あい子「システムバンダーがブックトラックを創る？～真夏の産学協同大作戦～」（2015年11月11日）
- ・石川敬史、渡辺哲成「図書館システムを活用した司書課程教育プログラムの設計：「図書館システムづくり」概念の検討につなぐ」日本教育情報学会第31回年会、茨城大学（2015年8月31日）

注・参考文献

- 1) 「協働（パートナーシップ）」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012.11、p.110-111.
- 2) 平尾元彦「キャリアから考える学生協働」『大学教育』12、2015.3、p.22-27.
- 3) お茶の水女子大学附属図書館LiSA活動日誌
(<http://ochadailisa.blog32.fc2.com/>)
(参照2016.1.18)
- 4) 和光大学附属梅根記念図書・情報館「Let's

Read Project」

(<http://www.wako.ac.jp/library/about/lrp/index.html>) (参照2016.1.18)

- 5) 八木澤ちひろ「大学図書館における学生協働について：学生協働まっぷの事例から」『カレントアウェアネス』316、2013.6、p.10-14.
- 6) 「図書館づくり運動」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012、p.450-451.
- 7) 扇元久栄ほか『図書館づくり運動実践記：三つの報告と新・図書館づくり運動論』緑風出版、1997.10.
- 8) 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店、1965.5(岩波新書、青559).
- 9) 朝霞市立図書館編『開館準備資料集成：朝霞市立図書館建設の記録』1993.
- 10) 栗原進「暮らしの中に生きる図書館：鶴ヶ島市立図書館づくり運動」『図書館づくり運動実践記』p.93-176.
- 11) 石川敬史ほか「女性図書館・情報担当者のキャリア形成に関する予備的考察」『日本教育情報学会年会論文集』29、2013.11、p.300-301.
- 12) 石川敬史ほか「司書資格取得学生の意識調査と司書課程教育プログラムの方向性」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要』10、2012.12、p.137-149.
- 13) 石川敬史、東聖子「十文字学園女子大学短期大学部司書課程の歩み：女性図書館員のキャリア形成をふまえて」『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』45、2015.3、p.119-142.
- 14) 「産学官連携」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店、2012.11、p.199.
- 15) 嶋田綾子「図書館システムの現在」『LRG：library resource guide』2、2013.2、p.63-155.
- 16) 前掲12)
- 17) 菅原信悟「図書館情報技術への関心を高める授業実践：「図書館情報技術論」に体験的な演習を組み入れる」『法政大学資格課程年報』3、2013、p.9-19.
- 18) 今井福司ほか「クラウド上に設置した図書館情

報システムを用いた授業実践』『情報の科学と技術』65 (7), 2015.7, p.313-318.

- 19) 従来は、顧客である図書館員への説明が多いため、「教育」の視点が入る説明方法を再考した。
- 20) 本稿の分析対象には含めなかったが、2015年度も同様の産学連携による教育実践を実施した。
- 21) 坂本句「情報化がもたらす教育の未来と現実」『教育』826, 2014.11, p.68-76.
- 22) 石川敬史, 大岩桂子「戦後移動図書館活動の検証：千葉県立図書館「ひかり号」調査の概要報告」『図書館界』64 (2), 2012.7, p.154-163.
- 23) 石川敬史, 大岩桂子「千葉県立図書館「ひかり号」利用者の分析：1940-1950年代を中心に」『図書館界』66 (2), 2014.7, p.156-164.
- 24) 石川敬史「移動図書館の再発見」『図書館雑誌』109 (7), 2015.7, p.426-428.
- 25) ブックトラックデザインの校了は9月上旬、現物の完成は10月中旬となった。
- 26) 参加した3年生の学科構成は、幼児教育学科1名, 人間発達心理学科1名, 人間福祉学科3名, メディアコミュニケーション学科2名であった。
- 27) 参加した3年生の学科構成は、人間発達心理学科2名, 生活情報学科3名であった。
- 28) 日本事務器株式会社における最終プレゼンテーション資料より (2015年10月6日)。
- 29) 石川敬史「移動図書館の定義と台数からみえる課題」『図書館車の窓』94, 2013.8, p.5-6.